2026.10.30

ふじた看図アプローチ研究会「ふじかん」第 36 回研究会報告

日　時：2026 年 10 月 30 日（金）18:00～20:00
場　所：対面（藤田医科大学）／ Zoom

今回は、対面 7 名、Web10 名の計 17 名が参加し、ハイブリッド形式で開催しました。
前半では、看図アプローチの理論を学び合い、後半では看図アプローチを体験しました。

★今回のトピック★

初参加者は３名で、そのうち１名はライター・イラストレーターとして活動されている方でした。また、８歳のお子さんがお父さんと一緒に看図アプローチに参加し、ビジュアルテキストを見ながら親子で考え、自分の気づきや考えをお父さんに伝えていたそうです。年齢や経験にかかわらず、それぞれの見方や考え方を共有する機会となり、看図アプローチを通じて学び合う仲間の輪がさらに広がったことを感じる研究会となりました。

１．看図アプローチの理論の学び合い

ブレイクアウトルームを用いたハイブリッド形式で３グループに分かれ、LTD 話し合い学習法に沿って学び合いました。題材は、テキスト『見方・考え方を育てる授業デザイン―看図アプローチの理論と実践―』第２章第４節「失敗事例から学ぶ『きゅうちゃん』の選び方」です。

話し合いでは、ビジュアルテキストを「とりあえず」選ぶのではなく、授業者自身も十分に思考を働かせることの重要性が共有されました。学習者のレディネスを踏まえ、教材文や発問を検討し、想定される解答や反応を考えるなど、予備実践の必要性について話し合いました。関連づけでは、看護過程を恋愛に例えて説明したところ、学生には恋愛の話ばかりが印象に残ってしまった経験が紹介されました。また、情報の授業では、学生のレディネスの違いに苦慮したことから、リフレクションペーパーを丁寧に読み込み、学生の理解状況を踏まえて授業を工夫したことも共有されました。

これらの経験を通して、授業者の意図と学習者の理解が必ずしも一致しないことを踏まえ、教材を十分に読み解き、学習者の多様な反応を想定した予備実践を行うことの大切さについて考えました。

２．看図アプローチの実践 －看図作文

第２部の看図アプローチでは、ファシリテータが提示した２枚の写真をビジュアルテキストとして、短い物語を創作しました。

はじめの「変換」では、写真１から「ハートの飾り」「パーテーション」「消毒薬」「ドアノブ」「電源コード」など、さまざまなものが挙げられました。参加者の発言から、自分では気づかなかったものにも目を向けることができました。

次に、「要素関連づけ」では、写真２を追加して、読み解きました。「パーテーションに星やハートの飾りが付けられている」「ホワイトボードに 20 歳おめでとうございますと書いてある」などの発言がありました。二十歳のお祝いという共通点や、ハートなどの飾り付けが共通していること、どちらも手作りの装飾が施されているように見えることなどが挙げられました。個々のものの関係から、２枚の写真全体のつながりへと視点を広げていきました。

続く「外挿」では、「この２つの飾り付けは、誰がしたのでしょうか」「これからどこで、どのようなことが起きるでしょうか」と問いかけ、写真から想像を広げました。「看護師が患者の誕生日を祝うために飾り付けた」という意見や、「大学生が友人のために準備した」という意見が出されました。また、「隣の部屋で誕生日会が開かれる」「飾り付けを患者の病室まで移動して驚かせる」など、さまざまな場面が想像されました。その後、これまでに出された意見をもとに、一つの物語を創作しました。



写真１



写真２

３グループが集まり、物語を共有しました。

１グループでは、大学の階段から転落して骨折し、入院している看護学生を主人公とした物語でした。手術を控え、誕生日を病院で迎えることになった学生を元気づけようと、同じ大学の卒業生である看護師が、看護学生の友人たちと共にサプライズの誕生日会を企画します。検査に行くと聞かされて車椅子でカンファレンスルームに案内された学生が、突然のお祝いに驚き、感激するという物語でした。

２グループでは、幼い頃から入退院を繰り返してきた患者が二十歳を迎え、長年その成長を見守ってきた看護師たちがお祝いする物語が創作されました。通院日に合わせてサプライズの準備を行い、本人がカンファレンスルームに入ると、スタッフから温かなメッセージが贈られます。二十歳を迎えられた喜びを、患者と看護師たちが分かち合う、心温まる物語となりました。

３グループでは、看護師３年目の「南田ミナミ」を主人公とする物語が生まれました。南田ミナミは、毎月行われる先輩看護師たちの誕生日会の企画を担当しています。毎回新しい企画を考えるのは面倒なので、同じ企画を毎月使い、先輩たちの年齢を明かさず「永遠の二十歳」としてお祝いするというユニークな設定です。予算がないためケーキは絵に描き、犬派も猫派も楽しめるように、さまざまな動物のイラストを描くなど、飾り付けにも工夫を凝らしました。普段の業務で使用しているホワイトボードやパーテーションは、裏返すだけで誕生日会の装飾に早変わりし、終了後も元に戻すだけなので片付けの手間がかかりません。カンファレンス終了後に、写真撮影や歌・踊りで盛り上がる楽しい誕生日会の様子が描かれました。

３グループの物語を共有した後、ファシリテータが写真にまつわる実際のエピソードを紹介しました。

写真は、緩和ケア病棟への転棟を控えた患者と、そのご家族のために、病棟の看護師たちが企画した誕生日会の様子でした。患者には、間もなく二十歳を迎える息子さんがいました。患者の病状を考えると、息子さんの誕生日を一緒に祝う機会が難しくなる可能性があり、看護師たちは誕生日を前倒しして、お祝いの場を設けたのです。

患者は、治療のために入退院を繰り返していましたが、「この消化器外科病棟がいい」と入院を希望されていたそうです。多忙な業務の合間に、看護師たちはホワイトボードに絵やメッセージを描き、飾り付けを準備しました。誕生日会にはご家族に加え、その病棟での実習を終えた看護学生も、看護師に声をかけられて参加し、皆で息子さんの二十歳を祝いました。

患者は飲食が難しい状態でしたが、看護師に口を潤してもらいながらみんなで乾杯しました。後日、息子さんは成人式用のスーツ姿をお母さんに見せることもできたそうです。

このエピソードを聞いた参加者からは、感動の声が聞かれました。誕生日会に参加した看護学生は、患者と家族の姿に涙しながらも、看護師たちが涙を見せず、明るく寄り添い、声をかけ続ける姿に、看護の専門職としてのあり方を感じたそうです。

患者が繰り返し同じ病棟への入院を希望していたことからも、日々の看護や看護師との関わりが、患者にとって大きな意味を持っていたことがうかがえます。また、多忙な業務の中でも、患者と家族の思いをくみ取り、限られた時間の中で誕生日会を実現した看護師たちの姿から、病気の治療だけでなく、患者の人生や家族の思いに寄り添う看護の大切さを改めて考える機会となりました。

最後に、振り返りの「きゅうちゃん」から、今の気持ちに近いものを選び、その理由を共有しました。「自分も一緒にお祝いしたい」「自分もギフトをいただいたような気持ちになった」「物語がつくられていくことにわくわくした」などの感想が寄せられました。

また、８ 歳のお子さんもお父さんと一緒に取り組み、物語の登場人物の名前を考えるなど、創作に加わっていたことが紹介されました。お父さんからは、活動の様子を見てお子さんが興味を持ち、自ら考え始めたことについて、看図アプローチや教材の力を感じたという感想もありました。

３．おわりに

今回の看図作文では、同じビジュアルテキストから多様な物語が生まれ、他者の発想を取り入れながら、一つの物語をつくり上げる楽しさを共有しました。さらに、写真の背景にある実際の出来事を知ることで、写真に対する見方や感じ方が深まりました。年齢や専門分野を超えて、それぞれの見方や考え方を持ち寄り、ともに学び合う看図アプローチの魅力を改めて感じる時間となりました。





集合写真

文責：織田千賀子